

プラトン『国家』の新しい校訂版について
 – S. R. Slings, *Platonis Rempublicam*, OCT –

納 富 信 留

1、OCT: *Platonis Opera* の改訂

プラトン著作集の原典校訂は、John Burnet による Oxford Classical Texts (OCT 版), *Platonis Opera*, 全五冊として二十世紀初頭に出版された⁽¹⁾。この校訂はその後増刷され続け、一世紀にわたってプラトン研究の定本となってきた。しかし、Burnet の OCT 版には不十分な点も多く、改訂の必要が長らく認識されてきた。新たな OCT 校訂は、複数の国々の文献学者、哲学者らが参加し、1995 年以来、新版が旧版に代わり始めている⁽²⁾。旧 OCT 版が抱える問題のいくつかを指摘しておく。

1) まず、Burnet 校訂版の取り扱いに注意が必要である。例えば第一巻は、通常、1900 年の初版がくり返しリプリントされたものと誤解されている(その原因は、OCT が表紙裏に、初版 1900 年とリプリント年だけを記していることによる)。しかし、私たちが用いているのは、1905 年に改訂された第二版のリプリントである⁽³⁾。実際、Praefatio には、1905 年 11 月に W 写本についての情報が追加されていることが付記され (x)、1905 年に公刊された H. Diels & W. Schubart の Berlin Papyrus 9782 校訂版も *Tht.* 校訂に用いられている (xiv)。1900 年版から 1905 年

(1) J. Burnet, *Platonis Opera, recognovit brevique adnotatione critica instruxit, Scriptorum Classicorum Bibliotheca Oxoniensis* (Oxford University Press): Tomus I (Tetralogia I-II), 1900; Tomus II (Tetralogia III-IV), 1901; Tomus III (Tetralogia V-VII), 1903; Tomus IV (Tetralogia VIII), 1902; Tomus V (Tetralogia IX, Definitiones, Notheuomenoi), 1907: 但し、これらの年代(書誌情報)には注意が必要である(後述)。

(2) OCT 新版の経緯については、現在第二巻の校訂作業に携わっている Swansea 大学の Fritz-Gregor Herrmann から教示を受けた。第一巻の作業は、William S. M. Nicoll (*Ap.*) と David B. Robinson がエディンバラで計画に合意したことから始まり、Winifred F. Hicken (*Tht.*) と Elizabeth Duke (間接伝承)、そして J. Christopher G. Strachan が加わり、1995 年に出版に至った。オランダでは Slings が独立に *Rep.* の作業を始めており(当初は Teubner 社から出版する計画であったという)、この対話篇を独立に出版してすぐに彼が亡くなってからは、Boter がその校訂版を収めた第四巻の編集にあたっている。第二巻については、Nicoll, Robinson, Strachan, Herrmann が第三テトラロギアの校訂を、Newfoundland 大学の Marc Joyal が第四テトラロギア校訂にあたっており、Joyal はいずれ第三巻に進む希望があるという。第五巻(第九テトラロギア)については、E. de Places による質の高い Budé 版があることから、目下のところ改訂の必要は感じられていないという。OUP は全体として編集の統括を図っておらず、各巻の編集方針も一貫していない。

(3) この点は、Denis O'Brien が指摘している: D. O'Brien, "Parmenides and Plato on What Is Not", *The Winged Chariot, Collected Essays on Plato and Platonism in Honour of L. M. de Rijk*, ed. M. Kardaun and J. Spruyt (Leiden: Brill, 2000), 99, n.30 (cf. 39, n.74).

版への改訂も含めて、諸版の異同について調査が必要であろう（同種の問題は新 OCT 版でも生じている：3(2) 参照）。

2) Burnet 自身が後に出版した二つの論文 (1914, 1920) では、自身の OCT 版と大きく異なるテキストの読みが多数提案されている⁽⁴⁾。旧 OCT 版は、これらの知見を活かしていない⁽⁵⁾。

3) Burnet は校訂にあたり、写本の扱いについては先行する照合成果に負う所が多く、apparatus criticus は（当時の標準としても）必ずしも十分ではない。この欠点は二十世紀初頭から認識されていたが、旧 OCT 版が絶大な信頼を勝ち得たのは、プラトンのギリシア語テキスト校訂にあたっての Burnet のセンスと、確立されたテキストの良質さにあった（apparatus の点では新版は格段の進歩を見せるものの、text の点で旧版を乗り越えたかには疑問が寄せられている）。

では、二十世紀末から本格化した新校訂作業は、Burnet 版を乗り越え、それに代わる、より信頼できるテキストを提供し得ているのか。2003 年にオランダの文献学者 S. R. Slings が校訂した『国家』新版を中心に、これを検証していきたい。

2、『国家』テキスト校訂の歴史

（以下の記述における写本記号は、Boter (α) = Slings (A6) に従う）

(1) 各種の校訂本

A0. I. Bekker, 1816-18: 現代文献学の出発点となるプラトン校訂 (*Rep.* 校訂は 1817)。Bekker は十二の写本を照合し、Stephanus 版 (1578, *vulgata*) 以来の読みを刷新。

A1. B. Jowett & L. Campbell, *Plato's Republic*, the Greek text edited with notes and essays, 3 vols. (Oxford: Clarendon Press, 1894): Jowett によって進められたオクスフォード・シリーズで、彼の死後に Campbell が出版した。Vol. I にテキスト、Vol. II に Jowett と Campbell それぞれの論考、Vol. III, Notes は、Jowett による註釈を Campbell が整理した巻。二人の意見が食い違う場合だけ、イニシャルで文責を明示している。テキスト校訂にあたっては、Bekker (A0) 以来、Stallbaum (1823¹⁾、Schneider (*Platonis Civitas*, 1830-33)、Baiter (Zürich 版, 1839)、Hermann (Teubner 版, 1852) らの校訂に依拠しつつ、A 写本を Campbell 自身が照合している。Vol. II, i-xxix (Jowett), 67-164 (Campbell) にテキストについての論考が付されている。十九世紀ドイツ文献学の推測による改訂傾向 (Hermann, Baiter, Cobet ら) に反対。この姿

(4) J. Burnet, "Vindiciae Platonicae I", *Classical Quarterly* 8 (1914), 230-236; "Vindiciae Platonicae II", *Classical Quarterly* 14 (1920), 132-138.

(5) 例えば *Sph.* 240 については、N. Notomi, *The Unity of Plato's Sophist: Between the Sophist and the Philosopher* (Cambridge University Press, 1999), 158, n.77, 159, n.78, 160, n.85 参照。

勢は Burnet (A3), Adam (A2, 4) らイギリス文献学に受け継がれる。

- A2. J. Adam, *The Republic of Plato*, edited with critical notes and an introduction of the text (Cambridge University Press, 1899) (repr. 1900): Adam が 1897 年に最初に校訂したテキスト。A 写本については 1891 年に自身で照合している。1907 年の J. Adam の死後、A. M. Adam の手で改訂されたものが 1909 年に再版されたが、それは 1902 年版 (A4) に従った校訂で、1897 年版とは異なる。
- A3. J. Burnet, *Platonis Opera*, recognovit brevique adnotatione critica instruxit, Tomus IV, tetralogiam VIII continens, Oxford Classical Texts (Oxford University Press, 1905): Burnet は OCT 全集の校訂において、まず *Rep.* を 1902 年に独立に出版し、その後、第八テトラロギアにまとめて出版。*Rep.* については、Burnet 自身は照合作業をしておらず、A 写本については、Campbell (A1), Adam (1897 版, A2)、D、M 写本については、Campbell が依拠した照合、F 写本については Schneider の報告に拠っている。
- A4. J. Adam, *The Republic of Plato*, edited with critical notes, commentary and appendices, 2 vols. (Cambridge University Press, 1902) (2nd. ed. 1963, with a new introduction by D. A. Rees): Adam は 1897 年に最初に出した *Rep.* 校訂をさらに A 写本の読みに近づけて改定し、五年後に註釈付の大版 (二冊) にまとめた。Burnet (A3) と同時期に出たため、後半の一部でのみそれを参照したと断っている。現在に至るまでもっとも包括的で定評ある註釈書。Schneider の註釈に大きく影響されたと述べている (vol. 1, ix)。Rees の解説によると、テキスト校訂方針の近さもあり、Burnet 版と概して違いは少ない結果となっている (xvii)。但し、両者には F 写本の位置づけをめぐる立場の違いと論争があった。Boter (α) は、むしろ Campbell (A1) とテキストの扱いできわめて近いとする。
- A5. E. Chambry, Platon, *Oeuvres Complètes VI, La République I (I-III)*, avec introduction d'A. Diès (Paris: Budé, 1932): ビュデ版のシリーズで、全三巻からなる。テキスト、対訳、脚注と、A. Diès による解説が付されている。写本については、cxxxviii-cxlvii で検討。基本的に Burnet の写本の扱い (A, D, F) に従っている (A, F と T)。本人の照合。この Chambry 版以降、二十世紀中には新たな *Rep.* の校訂本は作られなかった。
- A6. S. R. Slings, *Platonis Rempublicam*, recognovit brevique adnotatione critica instruxit, Oxford Classical Texts (Oxford University Press, 2003): OCT 改訂作業の一環で、第八テトラロギアをオランダ研究者が担当⁽⁶⁾。1977 年より Vrije Universiteit, Amsterdam の Siem Slings が文献学的調査を組織し、Gerard Boter のテキスト研究 (α) を受けて出版された最新校訂版。*Clit.* を CUP からまず出版し⁽⁷⁾、続いて *Rep.* を独立に出版。彼が *Crit.* の校訂を残して死去した後、*Tim.* 校訂と第八テトラロギアの完成は Boter に委ねられる。テ

(6) 校訂作業の経緯については、註 2 を参照。

(7) S. R. Slings, *Plato: Clitophon*, edited with introduction, translation and commentary (Cambridge University Press, 1999).

クスト校訂にあたっての判断の解説は、各巻ごとに *Mnemosyne* に発表され、単行本化されている⁽⁸⁾。どのような根拠や写本状況によって現行の校訂がなされているか、その論考から窺うことができる。

- a. G. Boter, *The Textual Tradition of Plato's Republic* (Leiden: E. J. Brill, 1989): Slings によって組織された第八テトラロギア校訂作業にあたり、教え子の文献学者 Boter が分担によって新 OCT 版 (A6) の前提となる文献学的作業を行なった。Rep. の写本について徹底した検討を施し、古代から中世・ルネサンスの間接伝承も網羅的に調査する。十九～二十世紀に議論され定着してきた写本の扱いを整理した、もっとも包括的な写本・校訂研究。

【関連文献】

- B1. P. Shorey, *Plato, The Republic*, 2 vols. (Harvard University Press, 1930-1935) (1937²): テキストと英訳が付いた Loeb Classical Library シリーズの中では、一般に信頼できる訳と脚注であると言われている。但し、Shorey は「序文」で、当時の文献学的な校訂作業を煩瑣で無意味と批判し、テキストは Hermann の Teubner 版に依拠している。
- B2. M. Vegetti, *Platone, La Repubblica*, vol. I (Libro I) (Napoli: Bibliopolis, 1998): 最新のイタリア語訳で脚注も充実している。テキストは付されておらず、基本的に Burnet の旧 OCT 版 (A3) に依拠している⁽⁹⁾。第 I 巻では Vegetti による解説に加えて、数名の研究者による解説(十一項目)が付されている。2006 年春の時点で、シリーズ第 II 巻以降も VI 巻(第八～九巻)までが刊行されている。

(2) 写本の扱いについて

1) 『国家』の写本について

Rep. が含まれる第八テトラロギアの写本伝承は、BTW に主に依拠する第一～七テトラロギアとは著しく異なっている。B 写本は第六テトラロギアまで、T、W 写

(8) S. R. Slings, "Critical Notes on Plato's *Politeia*": I, *Mnemosyne* 41 (1988), 276-298; II, 42 (1989), 380-397; III, 43 (1990), 341-363; IV, 49 (1996), 403-425; V, 52 (1999), 385-407; VI, 54 (2001), 158-181; VII, 54 (2001), 409-424; VIII, 55 (2002), 538-559; IX, 56 (2003), 449-462; X, 56 (2003), 513-534; Slings の生前に刊行されたこれらの論文は、彼の死後、S. R. Slings, *Critical Notes on Plato's Politeia*, edd. G. Boter and J. van Ophuijsen (Leiden: Brill, 2005) にまとめられ、編者による若干の訂正と補足が加えられている。元の論文になかったコメントが若干単行本に記載されている点(第一巻の範囲では、332c4-5 (5) と 337a3 (6-7))、及び、雑誌論文ではかなり豊富であった写本情報が単行本では新 OCT 版の表記に合わせて簡素化されている点など、両者の扱いには若干の注意が必要である。本稿では、単行本の頁で言及し、*Mnemosyne* での頁を括弧内に付す。

(9) 2006 年 2 月にイタリアで Vegetti 教授に直接確かめたところ、シリーズ初期には Burnet 版を使わざるを得なかったが、翻訳作業の終盤には(最後の数巻?)、Slings の新校訂も参照したとのことである。

本は第七テトラロギアまで(同じ T 写本でも、古い部分は十世紀に書かれたものであるが、*Rep.* 389d7 以降の部分は十五世紀の書写で重要性は少ない)。プラトン著作集 *Corpus Platonicum* は全体として二部に分かれて書写・伝承されていた。

Rep. について、A 写本を最良とする見方は Bekker (A0) 以来、十九世紀に確立、D 写本を次いで参照することもほぼ定着している。F 写本を独立と見なして重視する態度は、Schneider から Burnet (A3), Chambry (A5) に現れ、Adam らが反対したが、Boter (a) は Adam の反論を退ける。F 写本への注目は、*Gorg.* について E. R. Dodds (1959), *Men.* について R. S. Bluck (1961) が校訂作業で論じている⁽¹⁰⁾。

十九世紀始めに十二の写本を照合した Bekker の校訂作業は、誤りや不十分さが認識されていたが、それらすべての写本を照合しなおす作業には、長い時間がかかっている。

A、D、F の基本 MS を確認したのは、Boter (a) の成果であり、Slings の新校訂 (A6) は、その基盤に立った決定版と言える。

<主要写本>

- A Parisinus 1807: プラトン最古の写本(九世紀)で、B 写本(895 年)よりやや古い。第八・九テトラロギア、偽作を含む。
- D Venetus 185 (coll. 576): 十二世紀の写本で、第一～四テトラロギアと *Clit. Rep.* を含む。Schanz 以来、A 写本とは独立と認められている (Chambry (A5) を除く)。第一～四テトラロギアについても、B 写本とは独立と見なされる。
- F Vindobonensis Suppl. Gr. 39: 十四世紀(十三世紀?)。第六テトラロギア後半 (*Gorg.*, *Men.*) から第七・八テトラロギアと第九テトラロギア冒頭 (*Min.*) を含む。Burnet (A3) が初めて独立の価値を認めた。Adam, Stuart Jones と Burnet の間には論争があったが、二十世紀をつうじて位置づけは確立した (Boter (a), 99-110)。

2) 推測改訂への態度

「推測」による改訂は、Hermann, Baiter に代表される十九世紀ドイツ文学史に顕著であった。これに対して Campbell, Adam, Burnet ら十九世紀末から二十世紀初めのイギリス文献学者はそれを慎重に避ける傾向を見せた。一般的に言えば、Campbell と Adam がより写本に忠実・保守的で、Burnet は時折推測の読みを採用、あるいは apparatus criticus で紹介している。Adam の校訂作業でも、1897 年版 (A2) と 1902 年版 (A4) の間で、多くの箇所でもより A 写本の読みに戻す方向をとったとされる (A. M. Adam による 1909 年版への序文参照)。

3) 系図法の活用

写本間の関係については、ドイツでは K. Lachmann 以来の Stemmatalogy (系図法) に基づき、Schanz らが重要な考察を行なった。Adam, Burnet らイギリ

(10) E. R. Dodds, *Plato, Gorgias*, a revised text with introduction and commentary (Oxford University Press, 1959), 34-67; R. S. Bluck, *Plato's Meno*, edited with an introduction, commentary, and an appendix (Cambridge University Press, 1961), 129-147.

ス文献学者はそれへの反動から、系図による整理を嫌ったとされる。それに対して、Boter (α) は新たな写本系図を整理することで (xvii-xviii の表)、新校訂の基礎を固めた。Slings の校訂版はその系図を全面的に用いることで、きわめて簡潔な apparatus criticus を実現している。具体的には、ADF の主要三写本の情報のみを常時記載し、M を含む他の写本をすべて二次的なものとして、必要な場合以外は報告していない。

系図法による写本情報の整理がどこまで確実にについては、二十世紀後半でも大きな議論が続いている。とりわけ「開かれた伝承」の場合、系図法は実効性が少なくなること、並びに、古代・中世でよく読まれたテキストほど深刻な「混成」を示す傾向にあることが、文献学者たちによって指摘されている⁽¹¹⁾。プラトンのテキストには、古代においてすでに幾通りかの伝承があったと想定され⁽¹²⁾、もっとも普及していたと考えられることから、果たして三つのファミリーに整理しきれぬのかは疑問なしとは言えない。Boter (α)-Slings (A6) は、系図法への全面的な信頼と依存というオランダ文献学の特徴が発揮された校訂作業として、注意して取り扱うべきであろう。

4) 間接伝承、及び、他の資料について

間接伝承については、Jowett & Campbell (A1) はほとんど考慮していないが、Burnet (A3) は配慮して時折用いている。Adam (A2) は、間接伝承を Schneider の照合から、若干取り入れている。Boter (α) が間接伝承をすべて検討し、Index Testimoniorum (pp. 290-365) を作成。Slings (A6), pp. 411-428 が Index を増補。

直接引用は、Stobaeus, Eusebius, Iamblichus, Galenus (頻度の順) にあり、適宜参照されている。また、アラビア語での引用は Al-Farabi, *De Platonis Philosophia*; Galenus, *Compendium Timaei Platonis* にあり、Averroes の註解がヘブライ語で伝えられている。

コプト語での伝承 (588b1-589b3; *Cod. Nag Hammadi* VI 5) は、Boter (α), 279-280 が検討。Slings (A6) の校訂に取り入れられている (cf. Praefatio)。

Rep. の部分を含むパピルス (後二～三世紀) は Chambry (A5) が最初に使用して以来、テキスト情報としての必要性が認識された。Boter (α), Ch.6 は、十一のパピルスを検討している (今回検討した第一巻には、該当箇所はない)。

(11) L. D. レイノルズ, N. G. ウィルソン『古典の継承者たち—ギリシア、ラテン語テキストの伝承にみる文化史—』(西村賀子、吉武純夫訳、国文社、1996年)、第六章参照。系図法への批判は、P. Maas, *Textual Criticism*, trans. B. Flower (Oxford University Press, 1958) 等に見られ、実際に系図法を避けて写本情報をそのまま記載する校訂も、一部でなされている。

(12) プラトンの学園アカデメイアの中で学問的に正統に伝承されたテキストと、パピルスの出版物として一般に普及したテキストとでは、早い時期から大きな相違があったことは容易に想像される。また、プラトン生前の出版の有無や、アレクサンドリアでの編纂作業など、他にも様々な問題がある。但し、アカデメイア版は各時代のプラトン主義者の解釈を反映し、手を加えられていた可能性もあり、流布版が一概に信用できないとは言えない。例えば、A-Family がアカデメイア版に、F-Family が流布版に対応するといった仮説が検証され得るか、今後も多角的な研究が必要であろう。

3、新校訂の特徴

(1) M. Schofield による書評とその影響

Slings の新 OCT 版には、2004 年にケンブリッジ大学の M. Schofield による書評が出ており、全体としての高い評価と共に、一つの改訂箇所にも重大な疑問が投げかけられている⁽¹³⁾。Phronesis のエディターを長く務めた古典哲学者の評価として、新版がこれからどう受け入れられていくかについて、大きな影響力をもつものと思われる（実際、ケンブリッジ、オクスフォードの学者たちの間では、すでに Schofield の批判にそった一だが、一面的でより否定的な一評価が口口にされている）。

Schofield はまず、多大な労苦の末に完成した新版が、Burnet による旧版のテキストと大きく異なることはないが（これは Slings が新 OCT 版第一巻に対して下していた判定でもある）、apparatus criticus の飛躍的な充実があることを指摘する。その進歩には、写本間の関係・優劣の確定、及び、間接伝承の積極的な査定が大きな理由として挙げられる。

次に、Schofield は二つの点に疑義を投げかけ、転じて、新しいテキストの微細ではあるが着実な改善や充実ぶりを具体的に検証していく。

批判的にコメントした第一の点は、第六巻末部 511c2-d2 のテキストの読みに向けられる (608-610)。そこで Slings は、写本伝承ではまったく異読のない “καίτοι νοητῶν ὄντων μετὰ ἀρχῆς” の一節を Bolling の提案によって削除し、[] に入れる⁽¹⁴⁾。Slings は *Critical Note on Plato's Politeia*, 113-119 (= *Mnemosyne* 54, 173-180) でこの箇所の扱いを詳細に論じているが、削除提案の理由は大きく、文法と内容の両面にある。文法面では “καίτοι” が分詞構文をとる例は後世の用法として疑われる。そして内容解釈で Slings は、この一節が文脈に合わないとは断定して後世の挿入を示唆する。

「線分の比喩」のまとめに当たり、数学的対象の存在論的身分を語るグラウコンの発言は、プラトン哲学の核心として古今解釈の焦点となっている。Slings の提案に従うテキストを削除することは一彼自身の論拠があるにしても一、Schofield らの批判に耐えるには根拠が乏しく感じられる。文法的にも内容的にも説得的な弁護が可能であり、写本の上では一抹の疑いもない読みである以上、判断の行き過ぎが批判されるのは当然とも言える。

この点では、Slings も削除句を apparatus criticus に落とすことはせず、[] に入れていることは、読者の判断に一部委ねるという意味ではまだ良心的と言える（後

(13) M. Schofield, “Re-editing the Republic” (Featured Review), *American Journal of Philology* 125 (2004), 607-614. この他に、T. Dorandi, *Mnemosyne* 58 (2005), 136-137 に書評 (De novis libris iudicia) が出ている。

(14) Cf. G. M. Bolling, “καίτοι with the participle”, *American Journal of Philology* 23 (1902), 319-321; U. von Wilamowitz-Moellendorf, *Platon* II (Berlin, 1919), 345, n.1. このテキストへの疑問は、Adam, *The Republic of Plato*, vol. II, 86-87 (Appendix XI) が表明していたが、校訂版では Slings 以前に削除を提案したものはない。

で触れるように、新 OCT 版第一巻では、削除に [] 記号を用いずに、テキストから落とす傾向がある)。しかし、Schofield も危惧するように、権威ある OCT 版の印刷は影響力が大きい。

Slings は “Praefatio” で校訂にあたって従う七つの原則を挙げ、その第二を “editori non licet ignavo esse” とし、511d2 の改訂をモデルケースに挙げている (xiv)。概して保守的で堅実な校訂において、一つの目玉と考えたのかもしれない。

Slings はこの箇所校訂にあたり、オクスフォード大学の M. F. Burnyeat と議論を交わし、その経緯は *Critical Notes* にも注記されている (113, n. 1 = 173, note)。結局 Burnyeat は Slings の論拠に説得されなかったが、彼の元同僚 Schofield の書評も合わせて、Slings の新校訂の評価がこの箇所の扱いに集中し、哲学者の間で否定的な評価を生んでしまっているのは、残念なことである。私も 511d の削除提案は行き過ぎであることを認めるが、四百頁を超える校訂作業を一行で否定するのもまた行き過ぎであろう。

実際、Schofield の書評では、これ以外ではごく小さな批判が一つ、即ち、第三巻の問題ある箇所 (389b2-d6) について異動提案など何らかの注記すべきではなかったかという批判がなされているだけである⁽¹⁵⁾。続いて、Slings の優れた校訂が具体的に検証され、書評が高い評価で締めくくられている⁽¹⁶⁾。

(2) OCT 第一巻校訂との比較

Slings による *Rep.* 新校訂は、OCT の *Platonis Opera* 改訂作業の一環であり、その意味では、先立って 1995 年に出版された第一巻 (第一、二テトラロギアを収める) の校訂作業と比較することが有効であろう⁽¹⁷⁾。新 OCT 第一巻については、Slings 自身が 1998 年に書評を執筆しており⁽¹⁸⁾、そこでの批判や評価は、彼自身の校訂作業を見定める上で重要な意味をもつ。

(15) Schofield は新 OCT 版第一巻の *Crat.* 校訂について、いくつかの移動提案が apparatus criticus に記録されている点を挙げるが (そのうち 385b-d の移動は、彼自身による提案)、これは Schofield 自身の関心を反映するものであり、一般的にそれほど重要とは感じられない。逆に言えば、Slings 校訂にそれ以外に大きな問題点は見出せなかったということかもしれない。

(16) Schofield による次の評価は、イギリスの学者らしい抑制の効いた、ほぼ最高の讃辞として読まれる: “In laying out the evidence for the text, the new OCT is richer than its predecessor in information and stimulation alike. Slings’ edition is not perfect, but I find it hard to believe there will ever be a significantly better or more concise presentation of the text of the *Republic*.” (613)

(17) E. A. Duke, W. F. Hicken, W. S. M. Nicoll, D. B. Robinson, et J. C. G. Strachan, *Platonis Opera*, Tomus I, tetralogias I-II continens, recognoverunt brevique adnotatione critica instruxerunt, Oxford Classical Texts (Oxford University Press: 1995). 但し、二つの校訂本の間に、編集方針や表記の統一性はない (註 2 参照)。

(18) S. R. Slings, “De novis libris iudicia: E. A. Duke, W. F. Hicken, W. S. M. Nicoll, D. B. Robinson, J. C. G. Strachan, *Platonis Opera*, Tomus I tetralogias I-II continens (Oxford Classical Texts), 1995”, *Mnemosyne* 51 (1998), 93-102.

第一巻に収められた二つの四部作(八作品)は五人で分担して校訂にあたっている。それゆえ著作ごとに方針や出来にバラつきが生じており、Slings は、*Crat.* のテキストは群を抜いて良いとし、*Euthyphro*, *Crito* にも進歩を評価しているが、*Tht.* については厳しく批評し、残り作品については現時点では最善とした(101-102)。

Slings は書評の冒頭で、テキストは Burnet 版から大きくは異ならないが、それは正当なことであると述べ、新版の最大の成果は充実した apparatus criticus にあると評価する。他方で、とりわけ第二の四部作について写本関係の確定が不十分であることを、先行研究や具体的な検討から指摘する。新 OCT 版では D 写本は B 写本から独立と見なされているが、D 写本の独立性には強い疑いが残り、将来徹底した調査が必要であると提言している(94-97)⁽¹⁹⁾。もし Slings の指摘のように写本間の位置づけが未確定であるとしたら、apparatus での D 写本の情報の扱いに不十分さ(余剰?)が残ることになるだろう。

この点では、第八テトラロギアを担当したオランダ研究者たちは、Slings の指揮の下、G. J. Boter, G. Jonkers によって、まず写本関係の確定を行なって校訂にあたっている点は、第一巻への批判に対応している⁽²⁰⁾。

ここで第一巻から『ソフィスト』校訂を取り上げ、具体的に検討してみよう。

Slings は *Sph.* についてあまりコメントを寄せていないが、エディンバラ大学の古典学者 D. Robinson が校訂にあたったテキストには、多くの改善と同時に、改悪とも思われる推測が加えられている⁽²¹⁾。そのテキスト校訂では、W. S. M. Nicoll が BDTWP の写本情報を提供し、E. A. Duke が間接証言を調査している。

Robinson は、*Sph.* テキストの改訂箇所(すべてではない)について解説を公開している⁽²²⁾。そこで彼は、まず旧版との相違について概数を挙げている：

- (1) 主要写本と証言の中で、異なった読みを選択：25 箇所
- (2) Burnet 版での写本の読みから、推測による読みに変更：17 箇所
- (3) Burnet 版での推測から、写本の読みに戻す：8 箇所
- (4) Burnet 版が採っていた推測とは、別の推測を採用：6 箇所

この結果、旧版より 9 箇所あまり多く推測の読みが採用されていることになる。だが、Burnet はすでに、二次的な写本から 12 箇所、Stephanus 以降の近代推測から

(19) Boter, *The Textual Tradition of Plato's Republic* (1989), 58 は、第一～四テトラロギアについて、現在では D 写本が B 写本から独立と考えられてると報告。

(20) Slings, *Plato: Clitophon*, 340-344; Boter, *The Textual Tradition of Plato's Republic*; G. Jonkers, *The Manuscript Tradition of Plato's Timaeus and Critias*, diss. Vrije Universiteit (Amsterdam, 1989).

(21) 2005 年 9 月にギリシアで開催された AD Fontes 主催の "Plato's Sophist Seminar" でも、Myles Burnyeat, Michael Frede, Lesley Brown らとの議論の中で、いくつかの改訂箇所について検討し、否定的な評価が下された。

(22) D. B. Robinson, "Textual notes on Plato's *Sophist*", *Classical Quarterly* 49 (1999), 139-160. なお、彼は *Plt.* については、次の論文で同様のコメントを発表している: "The New Oxford Text of Plato's *Statesman*: Editor's comments", C. J. Rowe ed., *Reading the Statesman* (Sankt Augustin: Academia Verlag, 1995), 37-46.

75 箇所計 87 箇所の推測を採用しており、そこからの変更は穏当なものである、と校訂者は弁明している。

報告された以上の数字は、それ自体では不自然に感じられないかもしれない。しかし、Slings の校訂版は、Burnet が時折採用する推測の改訂をできるだけ主要写本の読みに戻そうとしていることが顕著であるのと比べると（次節参照）、Robinson の校訂が旧版以上に主要写本から離れているのは驚くべきことに思われる。また、これは単に数の問題ではなく、重要箇所の扱いについては、写本やギリシア語の読み以上に、校訂者の誤った読解がテキストを歪めてしまっている点がある。Burnet の校訂を明らかに改悪していると考えられる、典型的な二箇所を検討しよう。

1) *Sph.* 251a2-3

τὸν γοῦν λόγον ὅπηπερ ἂν οἰοί τε ὦμεν εὐπρεπέστατα διακριβωσόμεθα οὕτως ἀμφοῖν ἅμα.

appratus: διακριβωσόμεθα vel διαβεβαιωσόμεθα Robinson (διορθωσόμεθα iam Mueller): διωσόμεθα βTW: διασωσόμεθα Stallbaum)

この一語の読みについては、十九世紀には Stallbaum (διασωσόμεθα) 以外に、Wagner (διοισόμεθα)、Heindorf (διωξόμεθα)、Hermann (διαθησόμεθα) らの推測が提案されていた。しかし、Campbell が写本通り “διωσόμεθα” と読み「スキュラとカリュプデイスの間を抜ける航海」の比喩を用いた表現と解してから、現代では G. E. L. Owen らによってその読みが支持されてきている⁽²³⁾。それに対して Robinson は “Textual Notes” の中で、そういった比喩を読み込むことを幻想であると退け (153-155)、写本的には根拠のない自身の推測をテキストに印刷している。

Robinson は写本通りの読みがギリシア語として十分に可能であることを認めた上で、彼の文脈理解に基づいてその読みを退け、動詞の一部が欠けているとの想定を最善としている。この一節についての彼の解釈は（私の解釈では）根本的に文意を捉え損なっているが、さらに、校訂版に “δι<ακριβ>ωσόμεθα” と表記せず（ここではそういった工夫が可能）、推測をそのまま印字することで、読者にこの推測が何の問題もないように受け取られてしまう危険を与えている。

2) *Sph.* 240b

New OCT, b7: Οὐκ ὄντως ὃν ἄρα λέγεις τὸ εἰκόσ, ...

b12: Οὐκ ὃν ἄρα ὄντως, ...

Burnet OCT, b7: Οὐκ ὄντως [οὐκ] ὃν ἄρα λέγεις τὸ εἰκόσ, ...

b12: Οὐκ ὃν ἄρα [οὐκ] ὄντως ...

Notomi, b7: Οὐκ ὄντως οὐκ ὃν ἄρα λέγεις τὸ εἰκόσ, ...

b12: Οὐκ ὃν ἄρα οὐκ ὄντως, ...

ここはギリシア語が難解で多くの読みや改訂が提案されている箇所であるが、写

(23) L. Campbell, *The Sophistes and Politicus of Plato*, with a revised text and English notes, Oxford University Press, 1867, *Sph.* 135-136; G. E. L. Owen, “Plato on not-being”, G. Vlastos ed. *Plato, A Collection of Critical Essays I* (Notre Dame, 1971), 230.

本は総じて各行に二つずつ否定辞“οὐκ”を読んでいる。Burnet は OCT 校訂の時点では Badham の改訂に従って二つ目の否定辞を [] に入れて削除を指示したが、1920 年の論文では写本通りに読む別の提案をしている⁽²⁴⁾。私は 1999 年に出版した本で、写本の読みに従うことでプラトンが意図した「像」の定義が得られることを論証したが⁽²⁵⁾、Robinson は 2001 年の論文で、私の提案を批判し、二つ目の“οὐκ”はプラトン主義者による過剰な存在論がもたらした後世の挿入であるとする自説を展開した⁽²⁶⁾。さらに彼は、新 OCT 版テキストの 1997 年の再版で、240a8-c1 までの引用括弧に入れるという改訂を行なっている。引用括弧の導入は、一連の対話を「仮想ソフィストとのやりとり」と位置づける意図による。校訂者は“the addition of what are, I hope, helpful improvements of presentation”と述べ、基本的に彼の当初の読み方に忠実な修正と考えている (CQ, 435)⁽²⁷⁾。

校訂者の解釈は一つの提案として不思議なものではないが、Burnet 版が [] によって明示していた写本上の情報を、完全に apparatus に落としてしまうことで、独断的な扱いとの印象は拭えない。

以上 *Sph.* のテキストについて論じた二箇所は、解釈上の問題というだけでなく、テキスト校訂としてミスリーディングである。第二点に関して削除記号を本文で用いていないことは、実は新 OCT 版第一巻に共通する特徴（あるいは、方針）であり、校訂者が後世の挿入と見なした箇所は、写本情報の強弱に関わらず、すべて本文から apparatus に落としていることを意味する。この点は、Slings が書評ですでに適確に批判している⁽²⁸⁾。これに対して Slings 自身の校訂では、[] 記号も旧版と同様に用いている。

(3) Slings 校訂の傾向 — *Rep. I* の調査結果 —

慶応大学大学院演習（堀江聡、納富信留、栗原裕次の共同ゼミ）では、2005 年 4 月から『国家』講読を始め、新 OCT 版 (Slings, A6) を定本とし、それ以前の諸版 (J&C, A1; Burnet, A3; Adam, A4) との異同にも注意を払ってきた。異同の詳細は資料編にまとめてあるが、その要点は次のとおりである（行数の言及は新 OCT 版に拠る）。

(24) J. Burnet, “Vindiciae Platonicae II”, *Classical Quarterly* 14 (1920), 137.

(25) N. Notomi, *The Unity of Plato's Sophist*, 155-162 (esp. 158-161).

(26) D. B. Robinson, “The phantom of the *Sophist*: τὸ οὐκ ὄντως οὐκ ὄν (240a-c)”, *Classical Quarterly* 51 (2001), 435-457.

(27) ここでの問題は、1995 年の初版から 1997 年の再版への変更箇所が不明瞭で、両版の相違を記した書誌情報がまったく記載されていないことにある。これは基本的に OUP の責任であり、旧版の扱いにも同様の問題が見られた（註 3 参照）。

(28) Slings, 98-99 は、諸写本が一致して伝承しているが校訂者の判断で削除するという意味で [] を用いる従来の表記を擁護し、この括弧を（記号としては妥協であるとしても）完全に用いずに済ませることは、プラトンのテキストが実際以上に確実に伝承されているかの誤った印象を与える、と批判している。

以下の数字は、「資料：プラトン『国家』第一巻のテキストについて」に付された番号である。

< Burnet の旧 OCT 版からの変更 >

i) マイナー写本や証言から主要写本の読みへ：

1 ($A^3 \rightarrow ADF$), 7 (Theo $\rightarrow ADF$), 11 (Stob. (A) $\rightarrow ADF$ Stob. (SM)), 12 (Stob. $\rightarrow ADF$), 42 (Stob. $\rightarrow ADF$), 50 (My $\rightarrow ADF$ Stob.)

ii) 近代の推測から主要写本の読みへ：

2 (Nitzsch $\rightarrow ADF$), 34 (D に依拠した Burnet $\rightarrow AF$)

iii) A 写本から F 写本の読みへ：

8 (AD $\rightarrow F$, Stob.), 10 (AD $\rightarrow F$, Stob), 18 (AD $\rightarrow F$), 22 (AD $\rightarrow F$), 26 (ADF³ $\rightarrow F^a$), 32 (AD $\rightarrow F$, Eus.), 35 (AD $\rightarrow F$), 37 (A $\rightarrow F$), 38 (AD $\rightarrow F$), 44 (A $\rightarrow DF$, Stob.)

iv) A 写本から D 写本の読みへ：

15 (AF $\rightarrow D$), 28 (A $\rightarrow Asl D$)

v) A 写本の読みへ：

16 (D $\rightarrow AF$), 20 (DF $\rightarrow A$), 21 (DF $\rightarrow A$), 24 (F $\rightarrow AD$), 30 (F^a $\rightarrow ADF^3$), 45 (DF $\rightarrow A$), 52 (F Stob. $\rightarrow AD$), 53 (F Stob. $\rightarrow AD$)

vi) 写本の読みから近代の推測へ：46 (ADF Stob. $\rightarrow$ Tucker の削除)

vii) 写本の読みから独自の推測へ：40

viii) 写本情報不明：29

1) 校訂の保守性

読みの選択は概して写本に忠実で、より保守的と言える。とりわけ、近代の推測やマイナー写本から主要写本に戻すケースが多い。逆に、自らの推測を提案する 40 (349b7) を除いて、反対のケースは見られない。3 (2) で紹介した D. Robinson の校訂とは対照的である。

2) F 写本の重視

A 写本 (と D 写本) から F 写本 (と Stobaeus) の読みに移す例が目立つ (十例)。F 写本を重視する方向は Dodds の *Gorg.* 校訂に代表される二十世紀後半の傾向を進めるものであろう。この点では、F 写本を考慮しない Jowett & Campbell と Adam が A 写本の読みをとっている箇所、対照的に Burnet と Slings が共に F 写本の読み (しばしば Stobaeus も) をとる例も多い (八例：4, 23, 33, 39, 41, 48, 54, 56)。このことは、Slings が、すでに Burnet が多く採用していた F 写本からの読みをさらに増やしていることを示す⁽²⁹⁾。またそれらの箇所では、Campbell と Adam は F 写本の読みをほとんど考慮していなかったことが判る。

F 写本は、Schneider, Burnet によって古代の “vulgata” の代表とされ、

(29) Boter, 75 は、Burnet が AD に優先して F の読みを採用している多くの箇所について、確実性が低いとコメントしている。

Eusebius, Iamblichus, Stobaeus など古代の引用との一致が顕著と指摘されている。Stuart Jones はこれに反対し、学術的校訂ではなく一般に流通した“commercial text”の代表とした⁽³⁰⁾。Boter は、誤りが多いテキストであるが(特に小辞の付加・省略が目立つとされる)、他の写本にない正しい読みも多く保存されていると評価する⁽³¹⁾。Slings も、古代後期に遡る数々の読みの、唯一の証人と位置づけているのである。

3) 付加の削除

Burnet が含めていた語句を「付加」と見なして落とした場合が目立つ⁽³²⁾：11 (καὶ κοσμίῳ), 16 (οἰκοδομικοῦ τε καὶ), 18 (ὅτι ἔστιν δίκαιον), 23 (ἀρχομένοις)。

4) まとめ

第一巻に関しては、改訂によって哲学的な内容に大きく響く変更は見られなかった。今後も新校訂テキストを検討していく中で、プラトン哲学の解釈がどれくらい変わってくる可能性があるかについても、注意深く見ていきたい⁽³³⁾。

(慶応義塾大学)

(30) H. Stuart Jones, “The ‘ancient vulgate’ of Plato and Vind. F” *Classical Review* 16 (1902), 388-391.

(31) Boter, 99-110 は、F は数多くの誤りがあるにもかかわらず、テキストを校訂する上では D にもまして価値があると見なす。その大きな根拠は、D が F よりもより一層 A 系統と混淆していることにある。Boter は、Burnet が F をやや多用し過ぎていると指摘しながら(註 29 参照)、間接伝承によってしばしば読みが補強される F が、正しい読みを保持する唯一の主要写本であることを評価している。

(32) これは、Slings, *Critical Noets on Plato's Politeia*, 6 (= *Mnemosyne* 41, 284-285) で説明された校訂の方針によるものであろう。

(33) 本論考は、2005 年度の慶応義塾大学大学院での演習の調査・議論をもとにまとめられた。また、2005 年 10 月 16 日に慶応義塾大学三田キャンパスで開催された「フィロロギカ研究大会」でも報告し、議論していただいた。それらの機会に貴重な意見を頂戴した方々に感謝申し上げたい。共同演習を担当して下さっている栗原裕次氏、校訂作業について情報を寄せていただいた Fritz-Gregor Herrmann 氏、そして『フィロロギカ』の査読者の方々には、とりわけお礼を申し上げたい。